

魔法修行者

幸田露伴

青空文庫

魔法。

魔法とは、まあ何という笑わしい言葉であろう。

しかし如何なる国の何時の代にも、魔法というようなことは人の心の中に存在した。そしてあるいは今でも存在しているかも知れない。

埃及、印度、支那、阿剌比亚、波斯、皆魔法の間屋たる国だ。

真面目に魔法を取扱つて見たらば如何であろう。それは人類学で取扱うべき箇条が多かろう。また宗教の一部分として取扱うべき廉も多いであろう。伝説研究の中に入れて取扱うべきものも多

いだろう。文芸製作として、心理現象として、その他種の意味からして取扱うべきことも多いだろう。化学、天文学、医学、数学なども、その歴史の初頭においては魔法と関係を有していると
いって宜しかろう。

従つて魔法を分類したならば、哲学くさい幽玄高遠なものから、
手づまのような卑小^{せんろう}陋^{なほど}なものまで、何程の種類と段階とがあるか知れない。

で、世界の魔法について語つたら、一月^{ひと}や二月^{ふた}で尽きるわけのものではない。例えば魔法の中で最も小さな一部の厭勝^{ましない}の術の中の、そのまた小さな一部のマジックスクエアの如きは、まことに言うに足らぬものである。それでさえ支那でも他の邦^{くに}でも、

それに病災を禳はらい除く力があると信じたり、あるいはまたこれを演繹して未来を知ることを得るとしたりしている。洛書らくしよというものは最も簡単なマジックスクエアである。それが聖典たる易えきに関する。九宮方位きゆうきゆうほういの談だん、八門遁甲はちもんとうんこうの説せつ、三命さんめいの占うらな、九星きゆうせいの卜ぼく、皆それに続いている。それだけの談はなしさえもなかなか尽きるものではない。一より九に至るの数を九格きゆうかく正せい方ほう内ないに一つずつ置いて、縦線じゆうせん、横線おうせん、対角線、どう数えても十五になる。一より十六を正方形内に置いて縦線、横線、対角線、各隅かくぐう、随処四方角、皆三十四になる。二十五格内に同様に一より二十五までを置いて、六十五になる。三十六格内に三十六までの数を置いて、百十一になる。それ以上いくらでも出来るこ

とである。が、その法を知らないで列ならべたのでは、一日かかつても少し多い根こんすう数になれば出来ない。古代の人が驚異したのに無理はないが、今日はバツチエツト方法、ポイグナード方法、その他の方法を知れば、随分大きな魔方陣でも列べ得ること容易である。しかし魔方陣のことを談かたるだけでも、支那印度の古いにしえより、その歴史その影響、今日の数学的解釈及び方法までを談れば、一巻の書を成しても足らぬであろう。極 《ごくごく》 小さな部分の中の小部分でもその通りだ。そういう訳だから、魔法の談はなしなどといつても際限のないことである。

我わがくに邦での魔法の歴史を一瞥して見よう。先ず上古においてま厭じない勝じないの術があつた。この「まじなう」という「まじ」という語は、

世界において分布区域はなはの甚だ広い語で、我国においてもラテンやゼンドと連なっているのがおもしろい。禁厭きんえんをまじないやむると訓よんでいるのは古いことだ。神代じんたいから存したのである。しかし神代のは、悪いこと兇なることを押し禁とむるのであった。奈良朝になると、髪きの毛たなを穢さい佐保川の髑髏どくろに入れて、「まじもの」せる不逞ふていの者などあつた。これは咒詛じゆそち調よう伏ぶくで、厭魅えんみである、悪い意味のものだ。当時既にそういう方術があつたらしく、そういうことをする者もあつたらしい。

神おろし、神がかりの類は、これもけだし上古からあつたらう。人皇にんのう十五、六代の頃に明らかに見える。が、紀記ともに其処そこは仮託が多いと思われる。かみなびの神より板いたにする杉のおもひも

過ぎ
過ず恋のしげきに、という万葉卷九の歌によつても知られるが、
後にも「琴の板」というものが杉で造られてあつて、神しんきよう教を
これによりて受けるべくしたものである。これらは魔法というベ
きではなく、神教を精せい誠せいによつて仰ぐのであるから、魔法とし
ては論ぜざるべきことである。仏教ふと巫徒の「よりました」「よりました」
の事と少し似てはいるであろう。

仏教が渡来するに及んで咒詛じゆその事など起つたろうが、仏教ぶつぎら
いの守屋もりやも「さま／＼のまじわざものをしき」と水鏡みづかがみには
あるから、相手が外国流で己おのれを衛まもり人を攻むれば、こちらも自国
流の咒詛をしたのかも知れぬ。しかし水鏡は信憑すべき書ではな
い。

役えんの小角しょうかくが出るに及んで、大分魔法使いらしい魔法使いが
 出て来たわけになる。葛城かつらぎの神を駆使したり、前鬼ぜんきご後鬼ごきを従え
 たり、伊豆の大島から富士へ飛んだり、末には母を鍔てつ鉢ぱちへ入れ
 て外国へ行ったなどということであるが、余りあてになろう訳も
 ない。小角は孔雀くじやく明王みょうおう呪じゆを持してそういうようになったと
 いうが、なるほど孔雀明王などのような豪気なものを祈って修法
 成就したら神変奇特も出来る訳か知らぬけれど、小角の時はまだ
 孔雀明王についての何もが唐とうで出ていなかったように思われる。
 ちよつと調べてもらいたい。

白山はくさんの泰澄たいちようや臥行者がぎようしゃも立派な魔法使らしい。海上の船
 から山中いおりの庵こめづとへ米苞こめづとが連続して空中を飛んで行ってしまったり、

紫宸殿ししいでんを御手製おてせい地震でゆらゆらとさせて月卿げつけい雲客うんかくを驚かしたりなんどしたというのは活動写真映画として実に面白いが、元げ亨んこう釈しゃく書しょなどに出て来る景氣の好い訳わけは、大衆文芸ではない大衆宗教で、ハハア、面白いと聞いて置くに適している。

久米くめの仙人に至って、映画もニコニコものを出すに至った。仙人は建築が上手で、弘法こうぼう大師たいしなども初はじめは久米様のいた寺で勉強した位である、なかなかの魔法使いだったから、雲ぐらいには乗ったろうが、洗濯女の方が魔法が一段上だったので、負けて落第生となったなどは、愛嬌よだれと涎よだれと一緒にしたた滴るばかりで実に好人物だ。奈良朝から平安朝、平安朝と来ては実に外美内醜の世であったから、魔法くさいことの行われるには最も適した時代であった。

源氏物語は如何にまじないが一般的であつたかを語っており、法ほ力うりきが尊いものであるかを語っている。この時代の人は大概現

世祈祷を事とする墮落僧の言を無批判に頂戴し、将門まさかどが乱を起

しても護摩ごまを焚たいて祈り伏せるつもりでいた位であるし、感情の

紘いとくもは蜘蛛の糸ほどに細くなつていたので、あらゆる妄信にへばり

ついて、そして虚礼と文飾と淫乱とに辛からくも生きていたのである。

生いきりよう霊しりよう、死しりよう霊しりよう、のろい、陰陽師おんようしの術ふげき、巫覡ふげきの言、方位、祈

禱、物の怪け、転生じやみ、邪魅じやみ、因果、怪異、動物の超常力、何でも彼か

でも低頭ていとうしてこれを信じ、これを畏れ、あるいはこれに頼り、

あるいはこれを利用していたのである。源氏以外の文学及びまた

更に下つての今こんじやく昔く、宇治うじ、著聞集ちよもんじゆう等の雑書に就いて窺うかがつ

たら、如何にこの時代が、魔法ではなくとも少くとも魔法くさいことを信受していたかが知られる。今一いちいち例を挙げていることも出来ないが、大概日本人の妄信はこの時代にうんじょう醞うんじょう醸し出されて近時にまで及んでいるのである。

大体の談は先ずこれまでにして置く。はなし

我国で魔法の類の称しょうを挙げて見よう。先ず魔法、それから妖術、幻術、げほう、狐つかい、飯綱いづなの法、茶だき吉きに尼の法、忍術、合あいき気の術、キリシタンバテレンの法、口寄せ、識しきじん神をつかう。大概はこれらである。

これらの中うち、キリシタンの法は、少しは奇異を見せたものかも知らぬが、今からいえば理解の及ばぬことに対する怖ふ畏いよりの誇

張であつたらう。識神を使ったというのは阿倍晴明あべせいめいきりの談になつてゐる。口寄せ、梓神子あずさみこは古い我邦の神おろしの術が仏教の輪廻りんね説と混じて変形したものらしい。これは明治まで存し、今でも辺鄙へんぴには密ひそかに存するかも知れぬが、營業的なものである。但しこれには「げほう」が連絡してゐる。忍術にんじゆというのは明治になつては魔法妖術という意味に用いられたが、これは戦乱の世に敵状を知るべく潜入密偵するの術で、少しは印いんを結び咒じゆを持つる真しんご言宗んしゆう様の事をも用いたにもせよ、兵家へいかの事であるのがその本来である。合氣の術は劍客武芸者等の我が神威を以て敵の意氣を摧くじくので、鍛錬した我が氣の冴さえを微妙の機によつて敵に徹するのである。正木まさきの氣合きあいの談はなしを考へて、それが如何なるものかを猜さいす

ることが出来る。魔法の類ではない。妖術幻術というはただ字面じめんの通りである。しかし支那流の妖術幻術、印度流の幻師の法を伝えた痕跡はむしろ少い。小角しょうかくや浄蔵じょうぞうなどの奇蹟は妖術幻術の中には算さんしていかないで、神通道力というように取扱い来っている。小角は道士羽客どうしうかくの流にも大日本史などでは扱われているが、小角の事はすべて小角死して二百年ばかりになつて聖宝しょうぼうが出た頃からいろいろ取とり離はされたもので、その間に二百年の空隙があるから、聖宝の偉大なことやその道としたところはおよそ認められるが、小角が如何なるものであつたかは伝説化したるその人において認めるほかはないのである。聖宝は密教の人である。小角は道家ではない。勿論道家と仏家は互に相奪っているから、支

那において既に混淆しており、従つて日本においても修験道の所しよ為よなど道家くさいこともあり、仏家が「九字」をきるなど、道家の咒じゆを用いたり、符籙ふうろくの類を用いたりしている。神仏混淆は日本で起り、道仏混淆は支那で起り、仏法婆羅門ぼらもん混淆は印度で起つてゐる。何も不思議はない。ただここでは我邦でいう所の妖術幻術は別に支那印度などから伝えた一系統があるのでなく、字面だけの事だといふのである。

さて「げほう」といふのになる。これは眩げん法ほうか、幻法か、外げ法ほうか、不明であるが、何にせよ「げほう」といふ語は中古以来行まわられて、今に存している。増ます鏡かがみ卷五に、太政大臣藤原公ふじわらきみす相けの頭が大きくて大でこで、げほう好みだったので、「げはふ

とかやまつるにかゝる生頭なまごうべのいることにて、某それがしのひじりとかや、東山のほとりなりける人取りてけるとて、後のちに沙汰がましく聞えき」という事があつて、まだしやれ頭にならない生頭を取られたというのである。して見ればこの人の薨こうきよ去は文永四年で北条時宗ときむね執権の頃であるから、その時分「げほう」と称する者があつて、げほうといえは直ただちに世人がどういふものだと解することが出来るほど一般に知られていたのである。内典ないてん外典げてんというが如く、げほうは外法げほうで、外道げどうというが如く仏法でない法の義であろうか。何にせよ大変なことで、外法は魔法たること分明だ。その後になつても外法頭げほうあたまという語はあつて、福祿寿ふくろくじゆのような頭を、今でも多分京阪地方では外法頭というだろう、東京にも明治

頃までは、下駄の形の称に外法というのがあった。竹齋ちくさいだか何
 だったか徳川初期の草子そうしにも外法あたまというはあり、「外法の
 下り坂」という奇抜な諺ことわざもあるが、福祿寿のような頭では下り坂
 は妙に早かろう。

流布本太平記卷三十六、細川相模守清氏さかみのかみきようじ叛逆の事を記した
 段に、「外法成就の志しいつしようにん一上人鎌倉より上つて」云とある。

神田本同書には、「此志この一上人はもとより邪天道法成就の人なる
 上、近頃鎌倉にて諸人奇特きとくおもいの思をなし、帰依きえ浅からざる上、畠はたけ
 山入道やまにゆうどう諸事深く信仰頼たのみ入りて、関東にても不思議ども現じ
 ける人なり」とある。清氏はこの志一を頼んで、祇尼天だぎにてんに足あしか
 利義詮がよしあきらを祈いのり殺ころそうとの願がんじよう状を奉つたのである。さす

れば「邪天道法成就」というのは、祇尼天を祈る道法成就ということで、志一という僧はその法で「ふしぎども現じける」ものである。これで当時外法と呼んだものは、祇尼天法であることが知れる。けだし外法は平安朝頃から出て来たらしい。

狐つかいは同じく《ところどころ》にあり、狐媚狐惑こびこわくの談だんは

雑書小説に煩らわしいほど見える。印度でも狐は仏典に多く見え、野干ヤツカル（狐とは少し異ちがおう）は何時いつも狡智あるものとなっている。

《ふくふく》しいものではないのである。祇尼はまた阿修羅アシュユ

波子ラバスとも呼ばれて、その義は「飲血者」である。狐つかいの狐は

人に禍わざわいや死を与える者とされている。して見れば、祇尼の狐で、

お稲荷様の狐ではないはずである。大江匡房おおえのまさふさが記している狐

の大饗だいきようの事は堀河天皇の康和三年である。牛骨などを饗きようする
 のであつたから、その頃から祇尼の狐ということが人の思想に
 あつたのではないかと思われるが、これは真の想像である。明ら
 かに狐を使った者は、応永二十七年九月足利将軍義持よしもちの医師の
 高こうてん天てんという者父子三人、将軍に狐を付けたこと露顕して、同十
 月讚岐国さぬきのくにに流されたのが、年代記にまで出ている。やはり祇
 尼法であつたらうことは思遣おもいやられるが、他の者に祈られて狐が
 二匹室町御所から飛出とびだしたなどというところを見ると、将軍長病
 で治らなかつた余りに、人に狐を憑つけるなどという事が一般に信
 ぜられていたに乘じて、他の者から仕組まれて被きせられた冤罪えんざい
 だつたかも知れない。が、何にしる足利時代には一般にそういう

魔法外法邪道の存することが認められていたに疑ない。世が余りに狐を大したものに思うところから、釣つりぎ狐つねのような面白い狂言が出るに至った、とこういうように観察すると、釣狐も甚だ面白い。

飯綱いづなの法というといよいよ魔法の本統ほんとう大系だいけいのように人に思

われている。飯綱は元來山の名で、信州の北部、長野の北方、戸と

隠山かくしやまにつづいている相当の高山である。この山には古代の微生物

物の残骸が土のようになって、戸隠山へ寄つた方に存する処ところがあ

る。天狗の麦飯むぎめしだの、餓鬼の麦飯だのといつて、この山のみで

はない諸処にある。浅間山観測所附近にもある。北海道にもある、

支那にもあるから太平広記たいへいこうきに出ている。これは元來が動物質だ

から食えるものである。で、飯綱は仮名ちがいの擬字で、これが
 あるからの飯沙山である。そういうちよつと異なるものがあつた
 から、古く保食神即ち稲荷なども勸請してあつたかも知れぬ。
 ところが茶吉尼法は著聞集に、知定院殿が大権坊という奇験
 の僧によりて修したところ、夢中に狐の生尾を得たり、などと
 ある通り、古くから行われていたし、稲荷と茶吉尼は狐によつて
 混雑してしまつていた。文徳実録に見える席田郡の妖巫
 の、その靈転行して心を噉い、一種滋蔓して、民毒害を被る、
 というのも噉心の二字が、祇尼法の如く思えるところから考へる
 と、なかなか古いもので、今昔物語に外術とあるものもやはり
 外法と同じく、祇尼法らしいから、随分と索隠行怪の徒には

輾てんでん転てん伝受でんじゆされていたのだらうと思われる。伝説に依ると、水みづ

内郡ごおり荻原おぎわらに、伊藤いとう豊前守ぶぜんのかみ忠繩ただつなというものがあつて、後堀

河天皇の天福元年（四条天皇の元年で、北条泰時やすとき執権の時）に

この山へ上つて穀食を絶ち、何の神か不明だがその神意を受けて祈願こを凝こらしたとある。穀食を絶つても食える土があつたから辛し

防んぼう出来たろう。それから遂に大自在力を得て、凡およそ二百年余も

生きた後、応永七年足利義持の時に死したということだ。これが

飯綱の法のはじまりで、それからその子盛繩もりつなも同じく法を得て

奇験を現わし、飯綱の千日家せんにちけというものは、この父子より成立

ち、飯綱権現の別当ともいふべきものになつたのであり、徳川初期には百石の御朱印を受けていたものである。

今は飯綱神社で、式内の水内郡の皇足穂命神社である。

昔は飯綱大明神、または飯綱権現と称し、先ず密教修験的の靈区

であつた。他からは多くは、祇尼天を祭るとせられたが、山では

勝軍地蔵を本宮とするとしていた。勝軍地蔵は日本製の地蔵

で、身に甲冑を着け、軍馬に跨つて、そして錫杖と宝珠と

を持ち、後光輪を戴いているものである。如何にも日本武士的、

鎌倉もしくは足利期的の仏であるが、地蔵十輪經に、この

菩薩はあるいは阿索洛身を現わすとあるから、甲を被り馬に乗つ

て、甘くない顔をしていられても不思議はないのである。山城

の愛宕権現も勝軍地蔵を奉じたところで、それにつづいて太郎坊

大天狗などという恐ろしい者で名高い。勝軍地蔵はいつでも武運

を守り、福德を授けて下さるといふ信仰の対^{たい}的^{てき}である。明智光秀も信長を殺す前には愛宕^{まゐ}へ詣^{まゐ}つて、そして「時は今^{あめ}が下知る^{さつき}五月^{さつき}かな」といふを発句に連歌を奉^{ほう}つてゐる位だ。飯綱山も愛宕山に負けはしない。武田信玄は飯綱山に祈願をさせてゐる。上杉謙信がそれを見て嘲^{あざわら}笑^{わら}つて、信玄、弓箭^{ゆみや}では意をば得ぬより権現の力を藉^かろうとや、謙信が武勇優れるに似たり、と笑つたといふが、どうして信玄は飯綱どころか、禅宗でも、天台宗でも、一向宗までも呑吐^{どんと}して、諸国への使^{つかい}は一向坊主にさせてゐるところなど、また信玄一流の大ききで、飯綱の法^{おこな}を行^{おこな}つたかどうか知らぬが、甲州八^{やつしろ}代郡末木村慈眼寺^{すえき じげんじ}に、同寺から高野^{こうや}へ送つた武田家品物の目録書の稿の中に、飯繩本尊并に法次第一冊信玄公御^{みぎい}

隨身しんとあることが甲斐国志かいくし卷七十六に見えているから、飯綱の法も行ったか知れぬ。

勝軍地蔵か 祇尼天か、飯綱の本体はいずれでも宜よいが、祇尼は古くからいい伝えていること、勝軍地蔵は新らしく出来たもの、だきには胎蔵界曼陀羅たいざうかいまんたらの外金剛部院げこんごうぶいんの一尊であり、勝軍地蔵はただこれ地蔵の一変身である。大日だいにちきよう経卷第二に茶枳尼だきには見えており、儀軌真言ぎぎしんごんなども伝来の古いものである。もし密教の大道理からいえば、茶枳尼も大日、他の諸天も大日、玄奥秘げんおう密の意義理趣を談ずる上からは、甲乙の分け隔てはなくなる故にとかくを言うのも愚なことであるが、先ず茶枳尼として置こう。茶枳尼天の形相、真言等をここに記するも益無きことであるし、

かつまた自分が飯綱二十法を心得ているわけでもないから、飯綱修法に関することは書かぬが、やはり他のてんぶやしやぶ天部夜叉部等の修法の如くに、相伝を得て、次第によりによほう如法に修するものであろう。

東京近くでは武州高雄山たかおさんからも、今は知らぬが以前は茶枳尼の

影像を与えたものである。諸国に茶枳尼天を祭ったところは少からずあるが、今その法を修する者はあるまい。まして魔法の邪法のといわれるものであるから、真にじゆほう修法する者は全くあるまいが、修法の事は、その利益機能のある状態やりごう理合を語ろうとしても、全然そういうことを知らぬ人に理解せしむることは先ず不可能であるから、まして批評を交えてなど語れるものではない。管くだだぎつね

狐 という鼠ほどの小さな狐を山より受取つて来て、これを使

うなどということは世俗のややもすれば伝えることであるが、自分には知らぬ。天狗も茶枳尼には連なることで、愛宕にも太郎坊があれば、飯綱にも天狗嶽という魔所があり、がきまんだら餓鬼曼陀羅のような茶枳尼曼陀羅には天狗もあり、また茶吉尼天その物を狐に乗っている天狗だと心得ている人もある。むかし僧正へんじょう遍照は天狗を金網の中へ籠めて焼いて灰にしたというが、我らにはなかなかそのような道力はないから、平生いろいろな天狗おびやかに脅されて弱っている、俳句天狗や歌天狗、書天狗画天狗浄瑠璃じょうるり天狗、その上に本物の天狗に出られて叱られてもしたら堪たまらないから筆を擱おく。

我邦で魔法といえは先ず飯綱の法、茶吉尼の法ということになるが、それならどんな人が上に説いた人のほかに魔法を修したか。

志一や高天は言うに足りない、山伏や坊さんは職分的であるから興味もない。誰かないか。魔法修行のアマチュアは。

ある。先ず第一標本には細川政元まさもとを出そう。

彼の応仁の大乱は人も知る通り細川勝元かつもとと山名宗全やまなそうぜんとが天

下を半分ずつに分けて取って争ったから起ったのだが、その勝元

の子が即ち政元だ。家柄ではあり、親父の余威はあり、二度も京

都管領かんりょうになったその政元が魔法修行者だった。政元は生れな

い前から魔法に縁があつたのだから仕方がない。はじめ勝元は彼あれ

だけの地位に立っていても、不幸にして子がなかつた。そこでそ

の頃の人だから、神仏に祈願を籠めたのであるが、観音かんのんか何か

に祈るといふなら普門品ふもんぼんの誓ちかいによつて好い子を授けられそうな

ところを、勝元は妙なところへ願を掛けた。何に掛けたか。武將
 だから毘沙門びしゃもんとか、八幡はちまんとかへ願えばまだしも宜いいものを、
 愛宕山大権現へ願った。勝元は宗全とは異つて、人あたりの柔ら
 かな、分別も道理はずれをせぬ、感情も細かに、智慧も行届く人
 であつたが、さすがに大乱の片棒をかついだ人だけに、やはりきび※
 いところがあつたと見えて、愛宕山権現に願掛けした。愛宕山は
 七高山の一として修験の大修行場で、本尊は雷神らいじんにせよ素すさのお盞さん
のみこと鳴尊なりのみことにせよ破死神はむじんにせよ、いずれも暴あらい神で、この頃は既に勝
 軍地蔵を本宮とし、奥の院は太郎坊、天狗様のよりどころ抛な所ところであつた。
 武家の尊崇によつて愛宕は最も盛大な時であつたろうが、こうい
 う訳で生れた政元は、生れぬさきより恐ろしいものと因縁があつ

たのである。

政元は幼時からこの訳で愛宕を尊崇した。最も愛宕尊崇は一体の世の風であつたらうが、自分の特別因縁で特別尊崇をした。数《しばしば》社参する中に、修験者らから神怪幻詭の偉い談などを聞かされて、身に浸みたのであろう、長ずるに及んで何不由なき大名の身でありながら、葦腥を遠ざけて滋味を食わず、身を持つる謹厳で、超人間の境界を得たい望に現世の欲樂を取ることを敢てしなかつた。ここは政元も偉かつた。憾むらくは良い師を得なかつたようである。婦人に接しない。これも差支ないことであつた。自由の利く者は誰しも享樂主義になりたがるこの不穩な世に大自由の出来る身を以て、淫欲までを禁遏したの

は恐ろしい信仰心の凝こりかたま固りであつた。そして畏るべき鉄のよ
うな厳冷な態度で修法をはじめた。勿論生やさしい料簡方がたで出来
る事ではない。

政元は堅固に厳肅に月日を過した。二十歳、三十歳、四十近く
なつた。舟岡ふなおかき記にその有様を記してある。曰く、「京管領細川
右京太夫政元は四十歳の比こころまで女人禁制にて、魔法飯綱の法愛宕
の法を行ひ、さながら出家の如く、山伏の如し、或時は経を読み、
陀羅尼だらにをへんしければ、見る人身の毛もよだちける。されば御家おいえ
相続の子無くして、御内みうち、外様とさまの面、色、諫いさめ申しける。「な
るほどこういう状態では、当人は宜よいが、周囲の者は畏れたらう。
その冷い、しやちこばつた顔付が見えるようだ。

で、諸大名ら人の執成^{とりな}しで、將軍義澄^{よしずみ}の叔母の縁づいてい
る太政大臣九条政基^{まさもと}の子を養子に貰つて元服させ、將軍が烏帽^{えぼ}
子親^{しおや}になつて、その名の一字を受けさせ、源九郎澄之^{すみゆき}とならせ
た。

澄之は出た家も好し、上品の若者だったから、人も好い若君
と喜び、丹波^{たんば}の国をこの人に進ずることにしたので、澄之はそこ
で入都した。

ところが政元は病氣を時したので、この前の病氣の時、政元
一家の内 《うちうち》の人だけで相談して、阿波^{あわ}の守護細川
慈雲院^{じうんいん}の孫、細川讚岐守^{さぬきのかみゆきかつ}之勝の子息が器量骨柄も宜しいと
いうので、摂州^{せつしゅう}の守護代薬師寺与一^{やくしじよいち}を使者にして養子にする

契約をしたのであつた。

この養子に契約した者も將軍より一字を貰つて、細川六郎澄すみも元と名乗つた。つまり澄元の方は内との者が約束した養子で、

澄之の方は立派な人の口くちいれ入で出来た養子であつたのである。

これには種の説があつて、前後が上記と反対しているのもある。

澄元契約に使者に行つた細川の被官の薬師寺与一よじというのは、

一文不通いちもんふつうの者であつたが、天性正直で、弟の与二よじとともに無双

の勇者で、淀よどの城に住し、今までも度々《たびたび》手柄を立て

た者なので、細川一家では賞美していた男であつた。澄元のある

ところへ、澄之という者が太政大臣家から養子に來られたので、

契約の使者になつた薬師寺与一は阿波の細川家へ対して、また澄

元に対して困った立場になった。そこで根が律義勇猛のみで、心は狭く分別は足らなかつた与一は赫かつとしたのである。この頃主人政元はというと、段 魔法に凝こり募つつて、種 の不思議を現わし、空中へ飛上つたり空中へ立つたりし、喜怒も常人とは異り、分らぬことなど言う折もあつた。空中へ上のぼるのは西洋の魔法使もする事で、それだけ永い間修業したのだから、その位の事は出来たことと見て置こう。感情が測られず、超常的言語など発するというのは、もともと普通凡庸の世界を出たいというので修業したのだから、修業を積みばそうなるのは当然の道理で、ここが慥たしかに魔法の有難いところである。政元からいえば、どうも変だ、少し怪しい、などといっている奴は、何時いつまでも雪を白い、鳥を黒いと、

退屈もせずと同じことを言っている扱　《さてさて》下らない者
 どもだ、と見えたに疑うたがない。が、細川の被官どもは弱っている。
 そこで与一は赤あかざわ沢宗益そうえきというものと相談して、この分では仕
 方がないから、高圧的強請きようせい的に、阿波の六郎澄元殿を取立て
 て家督にして終しまい、政元公を隠居にして魔法三昧でも何でもして
 もらおう、と同盟し、与一はその主張を示して淀の城へ籠り、赤
 沢宗益は兵を率いて伏見竹田口ふしみたけだぐちへ強請的に上つて来た。

与一の議に多数が同意するではなかった。澄之に意を寄せてい
 る者も多かつた。何にしろ与一の仕方が少し突飛とつびだったから、そ
 れ下しもとして上かみを剋こくするこくと与一を撃てということになった。与一の弟
 の与二は大将として淀の城を攻めさせられた。剛勇ではあり、多

勢ではあり、案内は熟く知っていたので、忽に淀の城を攻落し、与二は兄を一元寺で詰腹切らせてしまった。その功で与二は兄の跡に代つて守護代となった。

阿波の六郎澄元は与一の方から何らかの使者を受取つたのであろう、悠然として上洛した。無人では叶わぬところだから、六郎の父の讃岐守は、六郎に三好筑前守之長と高畠与三の二人を付随させた。二人はいずれも武勇の士であつた。

与二は政元の下で先度の功に因りて大に威を振つたが、兄を討つたので世の用いも悪く、三好筑前守はまた六郎の補佐の臣として六郎の権威と利益とのためには与二の思うがままにもさせず振舞うので、与二は面白くなかつた。

そこで与二は竹田源七、香西又六などというものと相談して、兄と同じような路をあるこうとした。異なっているところは兄は六郎澄元を立てんとし、自分は源九郎澄之を立てんとするだけであつた。とても彼のように魔法修行に凝つて、ただ人ならぬ振舞いたまうようでは、長くこの世にはおわし果つまじきである、六郎殿に御世を取られては三好に権を張り威を立てらるるばかりである、是非ないことであるから、政元公に生害をすすめ、丹波の源九郎殿を以て管領家を相続させ、我が天下の権を取ろう、と一決した。

永正四年六月二十三日だ。政元はそのような事を被官どもが企てているとも知ろうようはない。今日も例の通り厳冷な顔を

して魔法修行の日課を如法に果そうとするほかに何の念もない。

しかし戦乱の世である。河内かわちの高屋たかやに叛そむいているものがあるので、

それに対して摂州衆、大和衆、それから前に与一に徒党したが降

参したので免ゆるしてやった赤沢宗益の弟 福王寺喜島ふくおうじきじま 源左衛門和田

源四郎を差向けてある。また丹波の謀叛対治のために赤沢宗益を

指向さしむけてある。それらの者はこの六月の末という暑気に重い甲冑

を着て、矢叫やさけび、太刀音たちおと、陣鐘じんがね、太鼓の修羅しゆらの衢ちまたに汗を流し血

を流して、追いつ返しつつしているのであつた。政元はそれらの上

に念を馳せるでもない、ただもう行法が楽しいのである。碁を打

つ者は五目勝もくつた十目勝つたというその時の心持を楽んで勝とう

と思つて打つには相違ないが、彼一石我一石を下くだすその一石一石

の間を楽しむ、イヤそのただ一石を下すその一石を下すのが楽しいのである。鷹を放つ者は鶴を獲たりことう鴻を獲たりして喜ぼうと思つて郊外に出るのであるが、実は沼沢林藪の間を徐ろおもむに行くその一歩一歩が何ともいえず楽しく喜ばしくて、歩に喜びを味わっているのである。何事でも目的を達し意を遂げるのばかりを楽しむと思う中は、まだまだ里さとの料簡である、その道の山深く入つた人の事ではない。当下とうげに即ち了りようするといふ境界に至つて、一石を下す裏に一局の興はあり、一歩を移すところに一日の喜よろこびは溢れていると思うようになれば、勝つて本もとより楽しく、負けてまた楽しく、禽とりを獲て本より楽しく、獲ずしてまた楽しいのである。そこで事相じしやうの成不成、機縁の熟不熟は別として一切が成熟するので

ある。政元の魔法は成就したか否か知らず、永い月日を倦うまず怠うらずに、今日も如法に本尊を安置し、法壇を嚴飾し、先ず一身の垢あかを去り穢けがれを除かんとして浴室に入った。三業さんごうじゆんじよう純淨じゆんじようは何の修法にも通有の事である。今は言葉をも発せず、言わんともせず、意を動かしもせず、動かそうともせず、安あん詳しやうに身を清くしていた。この間に日影の移る一寸一寸、一分一分、一厘一厘が、政元にとつては皆好ましい魔境の現前であつたらう歟、業か通ぎよう自じ在ざいの世界であつたらうか、それは傍はたからは解らぬが、何にせよ長い長い月日を倦まずに行じていた人だ、倦まぬだけのものを得ていなくては続かぬ訳だつた。

吉尼天は魔だ、仏ぶつだ、魔でない、仏ほとけでない。吉尼天だ。人

心を噉^{かんじん}尽^{じん}するものだ。心垢^{しんく}を噉^{かんじん}尽^{じん}するものだ。政元はどういう修法をしたか、どういう境地にいたか、更に分らぬ。人はただその魔法を修したるを知るのみであつた。

政元は行^{ぎようずい}水^{すい}を使つた。あるべきはずの浴衣^{よくい}はなかつた。小

姓^{せい}の波^な 伯部^{ははかべ}は浴衣を取りに行つた。月もない二十三日の夕風

は颯^{さつ}と起つた。右筆^{ゆうひつ}の戸倉二郎というものは突^つと跳り込んだ。

波^な 伯部が帰つて来た時、戸倉は血^ち刀^{がたな}を揮^{ふる}つて切付けた。身を

かわして薄手^{うすて}だけで遁^{のが}れた。

翌日^{あした}は戦^{たたか}だつた。波^な 伯部は戸倉を打つて四十二歳で殺された

主^{しゆ}の仇^うを復^{ふく}したが、管領の細川家はそれから両派が打ちつ打た

れつして、滅茶苦茶になつた。

政元は魔法を修していた長い間に何もしなかつたのではない。

ただ足利將軍の廃立をしたり、諸方の戦をしたりしていた。今は政元の伝を筆にしたのではない。

政元より後に飯綱の法を修した人には面白い人がある。それは政元よりも遙はるかに立派な人である。

関白、内大臣、藤原氏の氏うじの長者、従一位じゆ、こういう人が飯綱の法を修したのである。太政大臣きみすけ公相は外法のために生首なまくびを取られたが、この人は天文から文禄へかけての恐ろしい世に何の不幸にも遭わないで、無事に九十歳の長寿を得て、めでたく終つたのである。それは名高い関白兼かね実ざねの後の九条植通たねみち、玖山きゆうざん公こうといわれた人である。

植通公の若い時は天下乱麻の如くであつた。知行も絶え絶えで、如何に高貴の身分家柄でも生活さえ困難であつた。織田信長より前は、きんてい禁庭御所得はどの位であつたと思う。或記あるによればおよそ三千石ほどだつたというのである。如何に簡素清冷に御暮しになつたとて、三千石ではどうなるものでもない。ましてお公く卿様などは、それはそれは甚だきんぼう窘乏に陥つておられたものだろう。それでその頃は立派な家柄の人が、四方へ漂泊して、豪富の武家たちに身を寄せておられたことが、ざつしやじよう雑史野乘にややもすれば散見する。植通も泉州の堺、——これは富商のいた処である、あるいはまた西方諸国に流浪し、むこ聳そごうの十川（十川かずまさ一存の系だろうか）を見放つまいとして、しんしん搢紳の身ながらしやくに笏や筆をお擱いて

ゆみややりたち
弓箭鎗太刀を取って武勇の沙汰にも及んだということである。

この人が弟子の長頭丸ちようずまるに語った。自分は何事でも思立ったほどならば半途で止まずに、その極処まで究めようと心掛けた。自分は飯綱の法を修行したが、遂に成就したと思つたのは、何処どこに身を置いて寝ても、寝たところの屋やの上に夜半頃になればきつとふくろう鴟ふくろうが来て鳴いたし、また路を行けば行く前には必ず旋風つしかぜが起つた。とこういうことを語つたという。鴟は天狗の化するものであるとされていたのである。前に挙げた僧正遍照も天狗の化した鴟を鉄網に籠めて焼いたのである。屋の上で鴟の鳴くのは飯綱の法成就の人に天狗が隨身しんこう伺候するのである意味だ。旋風の起るのも、目に見えぬ眷属けんぞくが擁護して前駆ぜんくするからの意味である。飯綱の

神は飛狐ひこに騎のっている天狗である。

こういう恐ろしい飯綱成就の人であつた植通は、実際の世界においてもそれだけの事はあつた人である。

織田信長が今川を亡ぼし、佐 木、浅井、朝倉をやりつけて、三好、松永の輩はいを料理し、上洛して、將軍を扶たすけ、禁闕きんけつに参つた際は、天下皆鬼神の如くにこれを畏敬した。特に癩癬かんぺき荒氣あらかきの大將といふので、月卿雲客も怖れかつ諂諛てんゆして、あたかも古の木曾義仲よしなかの都入りに出逢つたようなさまであつた。それだのに植通はその信長に対して、立つたままに面とむかつて、「上総殿かずさか、入洛じゆらくめでたし」といつたきりで歸つてしまった。上総殿とは信長がただこれ上総かずさ介のすけであつたからである。上総介では強かろう

が偉かろうが、位官の高い九条植通の前では、そのくらいに扱われたとて仕方のない談だ。はなし植通は位官をはずかしめず、かつは名門の威を立てたのである。信長の事だから、是かくの如き挨拶で扱われては大むくれにむかれて、「九条殿はおれに礼をいわせに來られた」と腹を立つて、ぶつついたということである。信長の方では、天下を掃清そうせいしたのである、九条殿に礼をいわせる位の気でいたろう。が、これはさすがに飯綱の法の成就している人だけに、植通の方が天狗様のように鼻が高かった。公卿にも一人くらいはこういう毅然たる人があつて宜よかつたのである。

木下秀吉が明智を亡ぼし、信長の後を襲ついで天下を処理した時の勢いきおいも万人の耳目を聳動しやうどうしたものであつた。秀吉は当時こう

いうことをいい出した。自分は天の冥みよう加がに叶とつて今とうかく貴とい身み

 にはなつたが、氏も素性もないものである、草刈りが成上つたも

 のであるから、古いにしえの鎌子かまこの大臣おとどの御名おんなを縁よすがにして藤原氏になりた

 いものだ。というのは関白になろうの下ごころだった。すると秀

 吉のその時の素ばらしい威勢だったから、宜しゅうござろう、い

 と易やすい事だというので、近衛このえり竜山公ゆうざんこうがその取とり計はからいをしよ

 うとした。その時にこの植通公が、「いや、いや、五せつ掇け家に甲乙

 はないようなれど、氏の長者はわが家である、近衛殿の御おん儘ままに

 はなるべきでない」と咎とがめた。異論のあるのに無理を通すような

 ことは秀吉は敢あえてせぬところである。しかも当時の博識で、人の

 尊とくむ植通の言であつたから、秀吉は徳善院とくぜんいん玄げん以いに命じて、九条

近衛両家の議を大徳寺に聞かせた。両家は各 固くその議を執つたが、植通の言の方が根拠があつて強かつた。そうするとさすがに秀吉だ、「さようにむずかしい藤原氏の蔓つるとなり葉となろうよ

りも、ただ新しく今までになき氏うぢになろうまでじゃ」といった。

そこで菊きく亭てい殿いが姓氏録あをら検めて、はじめて豊臣秀吉となつた。

これも植通は宜よかつた。信長秀吉の鼻の頭をちよつと弾いたところ、お公卿様にもこういう人の一人ぐらいあつた方が慥たしかに好かつた。秀吉が藤原氏にならなかつたのも勿論好かつた。このところ両天狗大出来大出来。

秀吉は遂に関白になつた。ついで秀次ひでつぐも関白になつた。飯綱成就の植通は毎 言つた。「関白になつて、神罰を受けように」

と言った。果して秀次閔白が罪を得るに及んで、それに坐して近衛殿は九州の坊ぼうの津つへ流され、菊亭殿は信濃へ流され、その女むすめのいちだい一 台殿は車にて渡された。恐ろしいことだ、飯綱成就の人の言葉には目に見えぬ権威があつた。

和歌は勿論堪能の人であつた。連歌はさまで心を入れたでもなからうが、それでも緒余しよよとしてその道を得ていた。法橋ほつきよう紹しやう巴はは当時の連歌の大宗匠であつた。しかし長頭丸が植通公を訪とうた時、この頃何かの世間話があつたかと尋ねられたのに答えて、

「聚落じゆらくの安芸あきの毛利殿もうりの亭ちんにて連歌の折、庭の紅梅につけて、梅の花神代かみよもきかぬ色香かな、と紹巴法橋がいたされたのを人褒め申す」と答えたのにつけて、神代もきかぬとの業なりひら平の歌は、

竜田川に水の紅にくくることは奇特不思議の多い神代にも聞か
 ずと精を入れたのであるのに、珍らしからぬ梅を取出して神代も
 聞かぬといふべきいわれはない。昔伊勢の国で冬咲の桜を見て夢
 庵が、冬咲くは神代も聞かぬ桜かな、と作ったのは、伊勢であつ
 たればこそで、かように本歌を取るが本意である、毛利大膳が
 神主ではあるまいし、と笑つたということである。紹巴もこの
 人には敵わない。光秀は紹巴に「天が下しる五月哉」の「し」の
 字は「な」の字歟といわれたが、紹巴はまたこの公には敵わない。
 毛利が神主にもあらばこそその一句は恐ろしい。

紹巴は時　この公を訪うた。或時参つて、紹巴が「近頃何を御
 覧なされます」と問うた。すると、公は他に言葉もなく徐ろ

に「源氏」とただ一言。紹巴がまた「めでたき歌書は何でござり
 ましょうか」と問うた。答えは簡単だった。「源氏」。それきり
 だった。また紹巴が「誰か参りて御閑居を御慰め申しまするぞ」と
 問うた。公の返事は実に好かった。「源氏」。

三度が三度同じ返答で、紹巴は「ウヘー」と引退ひきさがった。なる
 ほどこの公の歩くさきには旋風つしかぜが立っているばかりではなく、
 言葉の前にも旋風が立っていた。

源氏物語にも言辞事物げんじじぶつの注のほかげんじじぶつに深き観念あるを説いて止観しかん
 の説という。この公の源語の注の孟津抄もうしんしょうは、法華経の釈に玄
 義、文句もんぐとありて扱さて、止観十卷のあるが如く、源氏についての止
 観の意にて説かれたということである。非常な源氏の愛読者で、

「これを見れば延喜えんぎの御代みよに住む心地する」といつて、明暮あけくれに源氏を見ていたというが、きまりきった源氏を六十年もそのように見ていて倦うまなかつたところは、政元が二十年も飯綱修法を行じていたところと同じようでおもしろい。

長頭丸おしえが時 教を請うた頃は、公は京とうふくじの東福寺の門前の乾かんて

亭院いんといふ藪の中の朽ちかけた坊ものさに物寂びた朝夕を送っていて、

毎朝 輪袈裟わげさを掛け、印を結び、行法怠らず、朝廷長久、天下太

平、家門隆昌を祈つて、それから食事の後には、ただもう机に

とした、すつきりとした、塵雜じんざつの気のない、平らな、落おちついた、

空室に日の光が白く射したような生活のさまが思われて、飯綱も成就したろうが、自己も成就した人と見える。天文から文祿の間

の世に生きていて、しかも延喜の世に住んでいたところは、実に面白い。

或時長頭丸即ち貞徳ていとくが公を訪うた時、公は閑栖かんせいの韵事いんじであるが、和やわらかな日のさす庭に出て、唐松からまつの実生みばえを釣瓶つるべに手ずから植えていた。五葉ごようの松でもあればこそ、落葉松からまつの実生など、余り佳いものでもないが、それを釣瓶などに植えて、しかもその小さな実生のどうなるのを何時いつ賞美しようというのであろう。しかしここが面白いのである、出来た人でなければ出来ない真の樂みを取つているところである。貞徳は公より遙はるかに年下である。我身の若さ、公の清らに老い瘦枯やせがれたるさまの頼りなさ、それに実生の松の緑りもかすけき小ささ、わびきつたる釣瓶などをを用い

ていらるるはかなさ、それを思い、これを感じて、貞徳はおのずから優しい心を動かしたろう、どうぞこの松のせめて一、二尺になるまでも芽出度めでたくおわしませ、と「植ゑておく今日から松のみどりをも猶なおながらへて君ぞ見るべき」と祝いて申上げると、「日のもとに住みわびつゝも有ありふれば今日から松を植ゑてこそ見れ」と、ただ物をいうように公は答えた。

その器きその徳その才があるのでなければどうすることも出来ない乱世に生れ合せた人の、八十ごろの齡としで唐松の実生を植えているところ、日のもとの歌には墮涙だるいの音が聞える。飯綱修法成就の人もまた好いではないか。

(昭和三年四月)

青空文庫情報

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第十五卷」岩波書店

1952（昭和27）年5月刊

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2007年11月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔法修行者

幸田露伴

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>